

<報告>

2022年度音楽教育研究ゼミの活動

— 雑誌記事にみるコロナ禍の音楽 —

**The Achievement of the 2022 Music Education Research Seminar:
Music during the COVID-19 Pandemic in Magazine Articles**

鯨井 正子

KUJIRAI Masako

2022年度音楽教育研究ゼミの3年生は、新型コロナウイルス感染症の流行と蔓延により影響を受け対応を講じた音楽や音楽教育に注目し、雑誌記事を資料に調査研究を行った。その成果として報告文「雑誌記事にみるコロナ禍の音楽——2022年度音楽教育研究ゼミの報告——」を作成し、学内で口頭発表を行った。本稿はゼミ担当の教員が報告文を整理・推敲して執筆し、研究作業を通して感じた特筆点にも言及する。

報告文の構成は全2章とし、第1章では日本における新型コロナウイルスの流行と各所の対応を概観した。第2章では、資料選択の経緯を述べた後、学校の音楽行事、邦楽や能楽の公演、歌唱授業、音楽科教育の再考と、3年生各自がテーマを設定し、コロナ禍での音楽や音楽教育の実際などを報告した。膨大な資料の整理に始まり、調査結果の報告、考察、そして期待や展望までを述べたことは、学びの面でも丁寧で誠実だったと言える。

キーワード：音楽教育研究ゼミ、新型コロナウイルス感染症、covid-19、コロナ禍、雑誌記事研究

はじめに

音楽教育研究ゼミの3年生は、研究に関わる一連の作業を経験しようと、年度ごとに題材と目的を決めて取り組んでいる。2022年度の受講生4名は、新型コロナウイルス感染症の流行により影響を受けた音楽や音楽教育の実際および対応に注目し、雑誌記事を資料に2022年6月から研究を始めた。その成果を報告文「雑誌記事にみるコロナ禍の音楽——2022年度音楽教育研究ゼミの報告——」にまとめ、学内で口頭発表を行った。

2020年4月に入学した大学生は、新型コロナウイルスとともに大学生活を送っていると言っても過言ではないだろう。今後もこのウイルスへの意識が必要な生活が続くと思われるが、入学時からコロナ禍に置かれた3年生だからこそ、音楽や音楽教育に携わる人や場の様々な経験を知ることには意義があると考え、題材に選んだ。

報告文の構成は全2章とした。第1章では日本における新型コロナウイルスの流行と各所の対応を概観した。第2章では、雑誌記事の検索から資料として選択するまでの経緯を述べ、3年生各自がテーマを設定し、コロナ禍での音楽や音楽教育の実際を報告するとともに考察や展望を述べた。

本稿はゼミ担当の教員が報告文を整理・推敲したものを提示し、「おわりに」では、研究作業を通して得られた中から教員が特筆すべきであると感じた点を挙げる。

第1章 新型コロナウイルスの流行と各所の対応

第1章では、新型コロナウイルスの流行と国、学校、合唱および舞台公演に携わる機関や団体の対応を把握した。資料には下記を用い、①、②、④～⑦のWebサイトへの最終閲覧は2022年12月12日に行っている。

- ① 緊急事態舞台芸術ネットワーク <https://jpasn.net/cn1/2021-10-21.html>
- ② 全日本合唱連盟 <https://jcanet.or.jp/index.html>
- ③ 全日本合唱連盟・東京都合唱連盟編、加藤英明監修『合唱活動における飛沫実証実験報告書 2020年12月8日』（東京、全日本合唱連盟・東京都合唱連盟、2020.12）

- ④ 東京都新型コロナウイルス感染症対策本部『新型コロナウイルス感染症対策に係る東京都の取組—第1波から第7波までの状況と成果—令和4年10月27日改訂版』
https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/022/394/b1.pdf
- ⑤ 内閣府新型コロナウイルス感染症対策推進室『基本的対処方針に基づく対応』
<https://corona.go.jp/emergency/>
- ⑥ 日本クラシック音楽事業協会ホームページ <https://www.classic.or.jp/2021/10/31021.html>
- ⑦ 文部科学省『新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する対応について』
https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/index.html#a002

上記の資料④によれば、研究を始めた2022年6月までのコロナ禍は、傾向と対策により6期、7波に分けられる。それらを下の表に整理する。

【新型コロナウイルス流行時期ごとの傾向と対策】作成：本稿執筆者

期	波	コロナ禍の傾向と対策のポイント
第Ⅰ期 2020（令和2）年1月～6月	第1波（4～5月）	未知のウイルスに対し感染拡大を食い止めるべく、人と人との接触削減（8割）を徹底
第Ⅱ期 2020（令和2）年7月～10月	第2波（7～8月）	「ウィズコロナ」という新たなステージに合わせた対策を推進
第Ⅲ期 2020（令和2）年11月～2021（令和3）年3月	第3波（11～3月）	かつてない規模に拡大した第3波に対し、あらゆる方面からの方策で対応
第Ⅳ期 2021（令和3）年4月～10月	第4波（4～6月） 第5波（7～10月）	感染力の強い変異株の脅威に直面する中、医療提供体制の確保とワクチン接種の加速化を推進
第Ⅴ期 2021（令和3）年11月～2022（令和4）年5月	第6波（1～5月）	オミクロン株の特性を踏まえた対策を徹底し「感染は止める、社会は止めない」
第Ⅵ期 2022（令和4）年6月～	第7波（6月～）	感染力の強い変異株の脅威に直面する中、医療提供体制の確保とワクチン接種の加速化を推進

コロナ禍の対応を講じた機関や団体のうち、文部科学省、合唱および舞台公演関連の対応を押さえておきたい。これらは第2章で学生各自が取り上げるテーマの背景にあたる。

まず、文部科学省は、コロナ禍第Ⅰ期中の2020年3月2日から5月31日まで学校臨時休業を実施し、3月24日、4月1日、7日にはガイドラインを繰り返し検討している。5月22日には「学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～『学校の新しい生活様式』～」を発表するも、こちらも改訂を繰り返し、第Ⅴ期中の2022年4月4日に2022.4.1 Ver. 8を出す。その直前の4月1日には「新型コロナウイルス感染症に対応した持続的な学校運営のためのガイドライン」も著した。

他、第Ⅲ期中の2020年12月10日には、文部科学省初等中等教育局長と文化庁次長が「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校において合唱等を行う場面での新型コロナウイルス感染症対策の徹底について（通知）」を発表している。この通知では、学校で合唱活動を行う場合は全日本合唱連盟が作成している感染症対策のガイドラインにのっとり活動を進めて欲しいと述べ、感染症対策の具体的な方法も載せている。その全日本合唱連盟は、第Ⅰ期にあたる2020年6月29日に「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」を発信し、第Ⅴ期中の2022年1月24日に第3.1版を更新した。

舞台公演では、第Ⅱ期にあたる2020年9月18日、緊急事態舞台芸術ネットワークが「舞台芸術公演における新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン（第三版）」を、同年12月1日には、クラシック音楽公演運営推進

協議会が「クラシック音楽公演における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」を発信している。これら2つのガイドラインは2021年10月21日に改定されている。

第2章 雑誌記事調査報告

1. 研究資料の検索から選択までの経緯

研究資料にした雑誌記事は、コロナ禍と音楽を題材に研究を始めた2022年6月段階の検索をもとに選んでいる。検索には国立音楽大学附属図書館所蔵の資料が検索できる WebOPAC（以下、OPAC）と、日本の論文をはじめとする学術情報の検索データベース CiNii Research（以下、CiNii）を使った。

2022年6月当時は新型コロナウイルスの流行から2年あまり経過していたためか、特にCiNiiでの件数は多く、例えば「コロナ」と入力すると84,476件がヒットした。そこで、「コロナ 音楽」と言葉を増やして検索し直したところ407件に、さらに、タイトルに「コロナ 音楽」と入っているものに限定すると154件に絞られた。

そこで本研究では、タイトルに「コロナ」、「コロナ禍」、「covid-19」など新型コロナウイルスを指すであろう単語と「音楽」、「音楽教育」もしくは「音楽 教育」が入っているもののみを拾うこととし、件数を絞っていった。検索に用いた言葉を以下に挙げる。

「新型コロナウイルス」
「コロナ」「コロナ 音楽」「コロナ 音楽教育」「コロナ 音楽 教育」
「コロナ禍」「コロナ禍 音楽」「コロナ禍 音楽教育」「コロナ禍 音楽 教育」
「covid-19」「covid-19 音楽」「covid-19 音楽教育」「covid-19 音楽 教育」
「ウィズコロナ」「ウィズコロナ 音楽」「with コロナ 音楽」「ウィズコロナ 音楽 教育」
「アフターコロナ」「アフターコロナ 音楽」「アフターコロナ 音楽教育」「アフターコロナ 音楽 教育」

言葉を掛け合わせた検索とタイトルのみでの収集により記事を絞り込むことはできたが、重複が見られるなど、検索結果の整理にもしばらくは試行錯誤を繰り返した。遂にはOPACとCiNiiに分け、さらにOPACは書籍（単行本）、雑誌、CiNiiは書籍（単行本）、雑誌（音楽雑誌、一般誌）、大学紀要論文、学会誌・学会紀要論文・研究団体論文ごとに整理し、この中から国立音大附属図書館所蔵の雑誌（音楽雑誌、一般誌）を資料にすることとした。理由は、大学図書館の資料は手に取りやすく、連載があった場合はコロナ禍での対応の経過が見られると予想したためである。しかし、このようにして集めた記事に目を通したところ、特に一般誌の中には、タイトルに「コロナ禍」や「音楽」が入っていても全面的に音楽を取り上げていない記事もあった。そのため、音楽や音楽教育を正面から誠実に扱っていると思われるものに限定した。次頁の表【本研究に用いた雑誌記事】は検討を経て資料に選んだ記事の一覧である。

本研究に用いた雑誌は、コロナ禍の取り上げ方により次の4つに分けることができる。

- 一冊全てを使って特集した＝『演劇と教育』、『音楽鑑賞教育』、『教育』、『現代思想』、『MUSIC MAGAZINE＝ミュージック・マガジン』
- 連載ではないが継続して取り上げた＝『音楽現代』、『教育音楽小学版』、『教育音楽中学・高校版』、『宝生』
- 連載や毎年の定番記事の中で話題にした＝『音楽の友』、『レコード芸術』
- 単発の記事や特集として取り上げた＝『季刊保育問題研究』、『邦楽ジャーナル』

このうち『教育音楽小学版』と『教育音楽中学・高校版』は、ともに2022年5月に「特集Ⅱ ウィズコロナの音楽科教育を振り返る」という記事を出している。『教育音楽』は小学版、中学・高校版とも、コロナ禍の音楽

【本研究に用いた雑誌記事】 作成：本稿執筆者

	『雑誌名』 あいうえお順	著者「記事タイトル」	編者・発行者・発行所、巻号：ページ、発行年月
①	『演劇と教育』	「コロナ禍でもできる！やってる！演劇教育」	日本演劇教育連盟編、Vol. 68 no. 1 (719) : 4-13、2021. 1
②	『音楽鑑賞教育』	「コロナ禍と音楽の授業」	音楽鑑賞振興財団、N45 (549) : 10-36、2021. 4
③	『音楽現代』	「海外緊急レポート 『新型コロナウイルス』とアメリカ、ドイツ音楽界」	芸術現代社、50 (5) : 114-116、2020. 5
④		「新型コロナウイルス禍の日本音楽界 その“現在”と“これから”」	芸術現代社、50 (7) : 78-93、2020. 7
⑤		「都響COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) 対策のための試演 求められる大胆な行動、石橋を叩く準備」	芸術現代社、50 (8) : 75-77、2020. 8
⑥		「緊急アンケート調査 結果報告 困っていること、知りたいこと、共有したいことはなんですか? (コロナ禍でのコンサート事情 2021年へ音楽を繋いでいくために 緊急アンケート調査 結果報告/2021年開催予定公演一覧 付)」	芸術現代社、51 (1) : 74-77、2021. 1
⑦		「緊急アンケート調査 結果報告 楽器指導されている方々に訊きました リモートレッスンの状況を教えてください (コロナとの共存 音楽を繋いでいくために… (2) リモートレッスンの現状 現場からの声を聞く)」、黒沢 国久、尾城 杏奈、山縣 美季「リモートレッスンの最先端『Disklavier (ディスクラビア)』」を語る リレー・インタビュー (コロナとの共存 音楽を繋いでいくために… (2) リモートレッスンの現状 現場からの声を聞く)」	芸術現代社、51 (2) : 57-62、64-68、2021. 2
⑧	『音楽の友』	「ザルツブルク音楽祭 2020」: 「100周年を新型コロナウイルス対策で迎えた音楽祭 (祝 100周年! ザルツブルク音楽祭 ソーシャル・ディスタンスで開催)」他	音楽之友社、78 (10) : 70-76、2020. 10
⑨		「特集 37人の音楽評論家・記者が選ぶ コンサート・ベストテン2020」: 「音楽を取り戻せ! 2020年コロナ禍を振り返って」他	音楽之友社、79 (2) : 37-70、2021. 2
⑩	『季刊保育問題研究』	安藤正彦「コロナ禍の保育 子ども・保護者とつながる活動 (音楽の配信) (第60回全国保育問題研究会分科会提案) -- (認識と表現 音楽)」	全国保育問題研究協議会 編集委員会、(308) : 195-198、2021. 4
⑪	『教育』	加藤愛子「同僚と共に創った校内音楽会 (特集 コロナ禍での挑戦を新年度の学びに)」	教育科学研究会、(903) : 13-19、2021. 4
⑫	『教育音楽小学版』	「緊急アンケート『音楽科と新型コロナウイルス』結果速報」、「ウィズコロナの歌唱授業を振り返る/オンライン授業を振り返る-第二波に備えて」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 75 no. 9 (885) : 15-43、2020. 9
⑬		「授業開きに使える! ウィズコロナの常時活動」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 76 no. 4 (8929) : 21-37、2021. 4
⑭		「歌う? 歌わない? 続・ウィズコロナの歌唱指導」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 76 no. 6 (894) : 21-37、2021. 6
⑮		「今年こそ! コロナ禍でもできる音楽会」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 76 no. 7 (8959) : 21-37、2021. 7
⑯		「コロナ禍でも『楽しい!』器楽実践」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 76 no. 8 (896) : 21-30、2021. 8
⑰	『教育音楽中学・高校版』	「緊急アンケート『音楽科と新型コロナウイルス』結果速報」、「ウィズコロナの歌唱授業を振り返る/オンライン授業を振り返る-第二波に備えて」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 64 no. 9 (765) : 15-47、2020. 9
⑱		「授業開き・歌唱に使える! ウィズコロナの常時活動」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 65 no. 4 (772) : 21-49、2021. 4
⑲		「歌う? 歌わない? 続・ウィズコロナの歌唱指導」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 65 no. 6 (774) : 22-39、2021. 6
⑳		「今年こそ! コロナ禍の校内合唱コンクール」	日本教育音楽協会 [編]・音楽之友社、Vol. 65 no. 7 (775) : 21-36、2021. 7
㉑	『現代思想』	玉手慎太郎「感染予防とイベント自粛 緊急特集 感染/パンデミック-新型コロナウイルスから考える-」	青土社、Vol. 48 no. 7 : 109-116、2020. 05
㉒	『邦楽ジャーナル』	「新型コロナウイルスで邦楽界に激震!」	クリエイティブミュージックハウス田中家、Vol. 399 (399) : 18-24、2020. 04
㉓	『宝生』	「コロナ禍を生き抜く能楽・宝生流」	宝生会、N67 : 1-6、2020. 11
㉔		「コロナ禍の危機を乗り越え、芸術活動を進めていくために」	宝生会、N68 : 2-6、2021. 1
㉕	『MUSIC MAGAZINE = ミュージック・マガジン』	「コロナ・ショックと音楽」	ニューミュージック・マガジン社、Vol. 52 no. 6 (703) : 66-81、2020. 06
㉖	『レコード芸術』	長木誠司「ディスク遊歩人 音盤街そぞろ歩き (140) コロナ禍とライブ性 予感と距たり」	音楽之友社、(69) : 057-060、2020. 8

科授業や学校での音楽活動を取り上げた記事をいくつか掲載しており、2022年5月の特集もコロナ禍を継続して取り上げたものと考えられるが、研究を始めた2022年6月段階の検索結果には上がらなかったため、対象外にしたことを述べておく。また、日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』2021年19巻には「特集 新型コロナウイルス問題と音楽教育」という企画が組まれ、7つの投稿記事、諸外国の動向、座談会が掲載されているが、このような学会誌は参考資料として扱った。

ゼミでは、4人の学生と一緒に【本研究に用いた雑誌記事】に挙げた26件の記事を読み、意見を交わした。その後、学生各自がテーマを決め、より深く記事を読み解き、報告文を書いた。次節からは、学生各自の報告文をゼミ担当の教員である本稿の執筆者が整理・推敲して述べ、適宜、学生の考察や展望を引用する。

2. 学生 A 「コロナ禍の学校での音楽行事—開催方法や感染症対策—」

学生 A はコロナ禍での学校の音楽行事に関心を持ち、中でも開催方法や感染症対策を丁寧に調べた。

学生がこのテーマを選んだのは、コロナ禍にて音楽が不要不急のものとして扱われた現実と、小学校・中学校の学習指導要領【特別活動編】に掲載されている学校行事の目標に齟齬を感じたことがきっかけである。学習指導要領では、学校行事の目標は「全校又は学年の児童〔生徒：『中学校学習指導要領（平成29年告示）』〕で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」（文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）』平成29年3月:186-7、同『中学校学習指導要領（平成29年告示）』平成29年3月:164）と書かれている。このことから学生は、体験的な活動を積極的に行い、仲間意識を持てるようにすることが音楽行事を開催する意義であり、コロナ禍のような場合でも開催することに意味はあるだろうと考えた。そこで、開催が懸念された音楽行事をどのような方法や感染症対策でもって実施したのか、あるいは実施しようと試みたのか、学校の実際や対応に注目したのである。

資料には、『教育音楽小学版』と『教育音楽中学・高校版』のどちらも2021年7月号の特集記事を使い、高校の例はなかったため、小学校4校の音楽会と中学校5校の校内合唱コンクールの実施に向けた取り組みを調べた。

以下、小学校と中学校ごとに、開催方法、練習での感染症対策、行事開催時の感染症対策の3つの観点から調査結果を述べる。

（1）小学校でのコロナ禍の音楽行事（音楽会） 4校の調査報告

① 開催方法

開催場所は例年通り体育館やホール、発表単位は学級数が多い学校は学級別に、学級数が少ない学校は学年別に行っている。演奏曲については、曲数を減らしたり楽器中心の発表にしたりといった感染症対策を行っている学校が多い。例年の音楽会と変えずに歌唱と合奏や全校合唱を行った学校もあり、このような学校には他の感染症対策に取り組むことで演奏内容を変更しないという工夫が窺えた。

観覧者について、3校は全校児童数の半数で収め、1校は各学年の保護者が観覧している。一方、観覧できなかった保護者に向けた対応では、YouTubeの配信とDVDを作成した学校が1校のみと少なく、理由には撮影や配信の技術面が困難であると考えられた。観覧できなかった他学年へは、3校が校内放送や学級ごとの鑑賞を実施しており、他学年の演奏に触れることで意欲を高めたり連帯感を深めたりできることを重要視したためと思われた。

② 練習での感染症対策

合奏練習の練習場所には、密な空間での感染リスクより音の拡散を懸念してか、体育館や教室など屋内を使っていた。そのため、練習時間は長時間にならないように配慮され、練習方法もパート練習を増やすことにより、

大人数で集まることを避けて密集しないように気を付けていたと思われる。

感染症対策には、換気、マスク着用、距離を保つ、手洗いを基本としていた。特に、吹奏楽器などは飛沫の心配があるため、水滴が落ちないようにタオルを当て、使用済みタオルをビニールに入れるなど注意が払われていた。他に、マレットを個人持ちにしたり共用楽器は学年ごとに消毒したりといった工夫も見られた。

③ 行事開催時の感染症対策

会場の座席は距離がとられ、演奏者から観客の間も3列ないし2メートルと、飛沫が飛ばない距離が空けられた。行事の開催時も、大半の学校が消毒、検温、換気、マスク着用という基本の対策を行っていた。また、救護室を設け、具合の悪い児童をすぐに隔離して安全を図っている学校もみられた。合奏をアコーディオンや電子楽器中心の編成にした学校もあり、これらも吹奏楽器による飛沫を減らすための工夫と考えられた。

(2) 中学校でのコロナ禍の音楽行事（校内合唱コンクール） 5校の調査報告

① 開催方法

開催場所を例年のホールや公会堂ではなく、体育館を使用することになった学校が2校あった。これについては、施設側が感染症対策のために貸し出しを断ったとも考えられる。

行事自体は全校を挙げての催しだが、人数を分散させようと学年別で行ったり、4校が発表単位を学級別にしたりと対策がとられていた。学年合唱のような大勢で歌うことも、密集により感染リスクが上がってしまうために取りやめる学校が多かったのではないと思われる。その中で、1校が学年合唱という名目でのハミング唱と3年生のみの合唱を行っていた。ハミング唱は通常の歌唱よりも飛沫が少ないという発想から、学年合唱を3年生のみにしたのは時間を短縮して感染のリスクを下げようとしたためと考えられる。

演奏曲は、1曲だけが2校、課題曲と自由曲の2曲を歌った学校が1校であった。曲数を減らすことは行事全体の時間を短縮するための工夫と思われる。

観覧については、学年生徒・職員のみが3校、加えて保護者が観覧することができた学校が2校あったが、人数を制限するために保護者の観覧をなくした学校が多い。観覧できなかった保護者へDVDを販売したりライブ配信したりと、配慮と工夫がみられた学校もあった。一方、観覧できなかった他学年への対応としてTeamsを使い全教室に配信したのが1校のみにとどまったのは、他の演奏に触れる機会が少ないことが危惧される点であった。

② 練習での感染症対策

練習場所は生徒同士が密集しないための工夫ゆえか、グラウンドや体育館など広い場所を使用していた。練習時間については1校しか例がなかったが、多くの学校が短い時間だったのではないかと想像される。練習方法は、ハミング唱、自宅でYouTubeを観る、パート練習を多用するなど、それぞれの学校で工夫していた。

練習時にはパーティーションの使用、マスクの着用、換気などの基本的な対策が行われていたが、パーティーションやマスクを自ら作っている学校もあり、歌うためへの工夫と試行錯誤が窺えた。

③ 行事開催時の感染症対策

会場の座席は、最前列から5列は使用不可とし、演奏者からの飛沫が届かないように工夫していた。また、1席ずつ空けた指定制にして隣同士の感染を防ぎ、感染が発生した場合に周囲の席の人に連絡できる対策もみられ、換気も常に気を付けられていた。

入場時には消毒や健康チェックカードの回収を行い、歌唱時は生徒間の距離をとり、歌い手と指揮者・伴奏者の間にもビニールカーテンを設置しているケースもあった。結果発表にZoomを使用していたのも感染症対策と言えよう。

以上がコロナ禍での小学校と中学校の音楽行事の実態である。開催方法には各学校の状況に応じた工夫がみられた。一方で、感染症対策に関しては、資料にした『教育音楽小学版』と『教育音楽中学・高校版』の2021年7

月号掲載あたりは拠り所となるガイドラインも確立されていないためか、それぞれの学校が独自の対策方法を模索している様子も感じられた。また、検温、消毒、換気などは基本的な対策であることからどの学校でも行われていたにもかかわらず、行事の実施を見合わせた学校もあった。

最後に学生 A は、今後、コロナ禍を挟んだ音楽行事の比較をするなど、より考察を深めていきたいと述べている。

3. 学生 B 「コロナ禍の邦楽」

学生 B は、『邦楽ジャーナル』と『宝生』を資料に、コロナ禍での邦楽界の実際を報告した。

コロナ禍は邦楽界にも多大な影響を及ぼした。『邦楽ジャーナル』2020年4月号によると、以下の表に示したように、2020年1月～3月の邦楽関連のイベント10件のうち、開催3件（1件は無観客開催）、中止5件、延期2件であった。

【2020年1月から3月までの邦楽公演の実際：『邦楽ジャーナル』2020年4月号 pp. 18-24より】

作成：学生 B、補整：本稿執筆者

	公演名	公演日	開催	中止	延期
1	WorldWoodDay 2020 Tokyo	3月17日～22日		○ 2月12日中止を 発表	
2	和楽器バンド 大新年会	2月29日 3月1日		○	
3	正派音楽院卒業演奏会	3月14日	○		
4	秋吉沙羅ライブ@南青山マンガラ	3月12日	○ 無観客開催		
5	都民芸術フェスティバル	1月～3月		○ 1月2月開催、 3月中止	
6	日本博2020オープニングセレモニー	3月14日		○ 2月28日無観客 実施を発表、3 月10日公演自体 の中止を決定	
7	第5回桐の響演奏会（桐朋学園芸術 短大日本音楽専修専攻の卒業生に よる演奏会）	3月27日		○	
8	第14回奏楽堂・学内公募最優秀企画 「多師彩々～師範科は、生きている」	3月27日			○ 3月2日時期未定 の延期発表、2021 年3月30日開催
9	藤本昭子地歌ライブ2020 97th	4月25日			○ 2020年10月18日 に延期
10	箏道音楽院「邦楽の祭典 in 東京」	3月29日	○		

このような中、能楽・シテ方宝生流の公式団体である宝生会は、公演開催に際し、多くの感染対策を行った。

入口では入場と退場の導線を分け、床にはソーシャルディスタンス確保のために目印を表示し、入場時のマスク着用、手指消毒、検温を実施した。スタッフ側も、受付にはビニールカーテンを設置し、係員はマスク、フェイスガードおよびビニール手袋を着用した。劇場内では座席制限を実施し、スペースの確保のために着席可能な席を全客席数の半分にした。舞台上では通常8名の能の地謡を5名に削減、かつクリアマスクを装着し、上演中の扉は換気を目的に開放した。その他、来場者の入館簿を作り、無観客公演の実施や公演の解説・対談の配信も行った。

稽古でも、消毒の徹底、密の回避、クリアマスクやフェイスシールドの着用その他、Zoom等を使用したリモート稽古、対面を避けるためにシールドを設置するなど、感染対策を行った。

さらに宝生会は、コロナ禍での感染対策から得た知見を活かし、新たなチャレンジを試みていた。例えば、2021年のテーマを「能の楽しみ方の多様化」とし、デジタル化への取り組みを強化するとともに、座席制限を実施した公演から着想を得て、間隔を置いてゆったり見られるプレミアムシートを夜能（宝生会による朗読×能楽という新しいスタイルの能楽公演）で導入した。会員制度についても、公演の座席指定を可能にしたりデジタルクーポンの発行を始めたりと、リニューアルさせた。

このようなコロナ禍での公演実施に努めた宝生会の取り組みに対し、学生Bは能楽のみならず邦楽界全体に、広くは舞台上演のアフターコロナにも生かされると考えており、インターネットやオンラインによるサービスの充実、公演の鑑賞方法やイベント内容の多様化、それに伴う若年層を取り込んだ客層拡大への期待を含ませながら、邦楽界の動向に眼差しを向けつつある。

4. 学生C「コロナ禍の歌唱授業の取り組みと傾向」

学生Cは、新型コロナウイルスの流行により生活に大きな影響が出始めた大学1年生当時、義務教育課程である小学校や中学校がどのように対応し、不要不急と言われた音楽の授業がどのように行われていたのかを知らなかったこと、また、2022年10月に東京都公立中学校の合唱指導ボランティアに参加して中学2年生を指導した際、歌うことに抵抗のある生徒が1人もおらず、前向きに合唱に取り組んでいる姿を見たことから、コロナ禍の音楽科授業の、特に影響を最も受けていると思われた歌唱授業に関心を持った。そこで選んだテーマが「コロナ禍の歌唱授業の取り組みと傾向」である。

資料には、『教育音楽小学版』、『教育音楽中学・高校版』、『音楽鑑賞教育』から歌唱指導や歌唱授業の記事を対象とした。ただし、Zoomを用いた座談会や討論にできた取り組みは情報不足と判断し、指導や授業の内容が詳しく記されている記事を取り上げている。そして、コロナ禍における歌唱の授業や指導の経過を捉え、それらの比較を試みようとして、雑誌と記事ごとに表にして整理することから始めている。

(1) 小学校の取り組み

『教育音楽小学版』の記事には、休校中のオンラインの取り組みについて紹介している教員が少なく、授業や指導での取り組みの経過を知ることも比較もできないため、対面授業での歌唱授業だけを表にまとめた。

【コロナ禍での小学校の歌唱授業】作成：学生C、補整：本稿執筆

『雑誌』発行年月	地域	取り組み（実施時期）	感染症対策
『教育音楽小学版』 2020.9	沖縄	「ときめきポイント」（児童がときめいた歌詞に♡マークをつけ、♡マークでいっぱいになった歌詞をみながら歌うという取り組み）／エアー歌い／ハミング	清掃／手洗い／マスク常時着用／換気／ソーシャルディスタンス
	宮城	姿勢／顔の体操／エアー歌唱／ハミング／音まね遊び	手洗い／消毒／マスク常時着用／ソーシャルディスタンス／2つの音楽室の活用／歌唱表現活動の制限
『教育音楽小学版』 2021.4	埼玉	ハミング／歌詞で歌う／階名唱／マスク着用での通常の歌唱授業（2021.2）	マスク常時着用／ソーシャルディスタンス
『音楽鑑賞教育』 2021.4	東京	手話で歌う	マスク着用のような感染対策の記述は無し

『教育音楽小学版』 2021.6	千葉	少人数活動+撮影→鑑賞/どう歌いたいか /朗読/リレー唱	マスク常時着用/少人数に分かれて歌う/ 通常よりも弱めの声で歌う/歌唱活動は短 時間
	東京	音当てクイズ/歌唱教材を鑑賞/歌詞の確 認/旋律を覚える/表現の工夫	タブレットを用い少人数で活動

先に記事への印象として、2020年の雑誌では感染対策について詳しく記載している記事が多かったが、2021年になってからは対策が当たり前になったのか、記載が少なくなっていることを挙げておく。

さて、小学校の歌唱授業については、2020年9月から2021年4月は3校中3校がハミングを行っており、それ以降の記事でハミングを行う学校はあるものの、減少傾向にあった。2021年4月発行の『音楽鑑賞教育』では、歌うことができないかわりにCDで曲を流しながら手話で歌詞を表現する取り組みを紹介している。このような取り組みは同時期に発行された『教育音楽小学版』には例がなく、この学校が私立学校ということもあってか、学校の独自性を感じた。

2021年2月からは、学校による差はあるものの、マスクの着用や換気、および歌唱時間の制限といった基本的な対策をすることにより歌唱授業を実施していたこともわかった。

(2) 中学校の取り組み

雑誌記事では「ワークシート」と「プリント」の2つの表記があったところを、指し示す内容は同じと解釈し、表中は「ワークシート」で統一した。

【コロナ禍での中学校の歌唱授業】作成：学生C、補整：本稿執筆者

『雑誌』発行年月	地域	取り組み(実施時期)	感染症対策
『教育音楽中学・高校版』2020.9	愛知	歌唱を強制、強調しない/ハミング	独自のガイドライン作成/手洗いうがい/ 消毒/合唱用マスク着用/少人数+換気で マスクなし
	大阪	歌唱授業再開(2020.9)/音取りゲーム/ユニ ゾン/ワークシートで表現の工夫をみる/1人 ずつ別室でマスクを外して実技テスト	消毒/換気/マスク常時着用/生徒の判断 でフェイスシールド使用
	神奈川	歌唱授業再開(2020.6.15)/歌う時間を短く /長時間歌わない/範唱を聴く/曲の背景、 歌詞の意味を調べる/発音/唱法/ワーク シートで表現の工夫をみる	消毒/換気/ソーシャルディスタンス
『教育音楽中学・高校版』2021.6	富山	楽曲に対するイメージを膨らませる時間を 増やす/通常の歌唱授業/楽譜と向き合う /歌詞と向き合う/朗読/聴く時間を増や す/壁練習	多目的スペースの活用/歌う時間を短く
	福島	パート練習/小さな合唱(2パートでの合わせ や各パートを半分の数にして歌うこと)	マスク常時着用/換気/ソーシャルディスタンス /消毒/歌う時間を短く/パート練習は別室
	石川	耳を育てる(ハミングや母音唱を用いて聴 く力を育てること)/朗読	マスク常時着用/ソーシャルディスタンス /換気/消毒
	横浜	歌唱→座学→歌唱/ワークシートで表現の 工夫をみる/別室+少人数でマスクを外し て歌唱の実技テスト	ソーシャルディスタンス/換気

中学校の調査結果には小学校よりも学校ごとの差が感じられた。

その1つは、『教育音楽中学・高校版』2021年6月号の記事に、引き続きハミングを取り入れるなどして、歌唱やその時間を制限している学校があったことである。不安定ながらも文部科学省や日本合唱連盟がガイドラインなどを発信していたにもかかわらずハミングなどを実施していたということは、当時の感染状況や地域の方針等に基づいたものかもしれないが、1番は生徒や保護者の不安感が影響していると考えられる。

中学校全体としてワークシートを使った授業が行われていたのも特徴の1つに挙げられる。コロナ禍以前の歌唱授業は楽譜があれば成立していたと考えられるため、ワークシートの使用は大きな変化と言えよう。ワークシートを使う理由はマスクでは表現を読み取ることができないためと記事では述べていたが、活用するとすれば評価の観点である思考・判断・表現を平等に読み取るための工夫にも通じる。

学生Cは、コロナ禍における小学校と中学校の歌唱授業について、基本的な感染症対策を常に行いながら想定していたよりも早く歌唱の授業が行われていたことがわかったと述べている。また、コロナ禍のために学校によって違いがあったものの、歌唱授業を行ってれば、合唱ボランティアで経験したような歌うことに抵抗を持つ生徒がいないことも納得できたという。さらに、コロナ禍における歌唱や合唱の様々な取り組みを知ったからこそ、昨今注目されているICT教育のようなデジタル化とは違うアナログであっても、誰かと声を交わすことで喜びを広げる合唱という文化が絶えないようにと述べている。

5. 学生D「『中学校の音楽科教育の当たり前とは何か』—学習指導要領から読み解く音楽科教育—」

学生Dは、コロナ禍における音楽や音楽教育の雑誌記事を読み進める中で音楽科教育の変化を感じ、コロナ禍前は「当たり前」だった音楽科教育を生徒の視点から改めて見つめるとともに、音楽科教育の今後の可能性にも言及した。

新型コロナウイルスの流行により全国に一斉休校が要請され、授業では工夫や新たな提案がなされた。音楽科もアイデア溢れるオンライン授業づくりが試みられたが、ゼミでの研究資料に使用した雑誌記事は、学校や家庭の通信環境により、授業が行えなかったり成績評価の対象となる提出物が提出できないケースを伝えている。また、全国の感染状況や各学校の判断に沿って音楽科の授業は行われるようになって、感染症流行直後と比べて緩和しているとはいえ表現活動の制約は続き、特に歌唱と器楽は飛沫感染による感染症拡大防止の影響により慎重に授業が実施されたこともわかった。一方、創作や鑑賞は感染症の影響をあまり受けることなく実施され、休校期間中のオンライン学習では、自宅学習の課題に鑑賞教材を扱った実践例もみられた。これは、鑑賞の聴く活動が歌唱などの技能の向上にも繋がるなど、音楽との関わり方を考えることのできる良い授業例である。

では、コロナ禍以前の音楽科教育はどのようなことを目標としていたのか、中学校学習指導要領（平成29年告示）音楽編第2章第1節にある音楽科の目標を、生徒が「できる」という視点と音楽科の存在意義を関連づけながら眺めてみよう。

中学校学習指導要領（平成29年告示）音楽編第2章第1節内の音楽科の目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。

(1) と (2) は多様な音楽文化を尊重する態度の育成になり、音楽科教育で基礎的な知識や技能を学び、多様な音楽文化と触れ合っていくことは、我が国や他国の伝統的な音楽文化を理解し、継承していくことができると考えられる。(3) は豊かな人間性や協調性の育成である。

では、音楽の授業を想定した場合、生徒は何ができるのか。

音楽の授業は歌唱、器楽、創作、鑑賞の領域や分野ごとに扱う単元は異なるが、授業内での「主体的・対話的で深い学び」の授業目的は同じだと考える。そのため授業を行うことで生徒は豊かな感性を育むことができ、グループ・ワーク等によって能動的に学ぶことができる。また、音楽行事では仲間と一つの音楽を作り上げていくときの大変さや楽しさを感じることができる。

このように、音楽科の目標を生徒ができる具体的な内容から読み解いたことにより、生徒が音楽を学ぶ必要性や音楽科のかけがえのない存在意義を見出すことができる。学習指導要領の改訂により「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進として求められたアクティブラーニングや、音楽科と社会との交流、さらには生涯学習も、音楽科の目標と生徒ができること、言い換えれば生徒による達成を促すと言える。

つまり、音楽科教育とは、生徒が音楽を学ぶことの意味や価値を実感でき、教師が学習成果を生かすために授業内外の音楽活動を取り入れながら指導を行っていくことである。そこには、能動的に学習できるよう教師が生徒の視点に立つことも大事になる。

コロナ禍を機に、改めて学習者である生徒の視点に立つことの大切さに気付くとともに、「新しい生活様式」に合わせた音楽科教育が「当たり前」になっていくことも予想される。2023年度までに整備を予定していた1人1台の端末を介してICT教育を行う「GIGA スクール構想」も、コロナ禍の影響により3年前倒しされたが、コロナ禍にありながらも前倒しがメリットに見えてくる。つまり、これは「新しい生活様式」のもとに行われた「新たな授業の工夫や試み」でもある。

学生Dは、今後、音楽科教育の「当たり前」と「新たな授業工夫や試み」をどのように併用していくのか、引き続き見つけていきたいと述べている。

おわりに

2022年度音楽教育研究ゼミ3年生の研究作業を通して、教員から見た特筆点を2つ挙げる。

1つめは、資料の選択が比較的丁寧にできたことである。音楽教育研究ゼミの3年生に研究や調査を働きかける際、一連の研究作業を経験することを第一義に、学生が関心を持てると思われること、比較的取り組みやすいこと、資料が多いなど情報の確実性や説得力に期待できることを考え、テーマや題材を選んでいるが、予想通りというべきか、コロナ禍に関する資料が多かった。そこで、第2章の「1. 研究資料の検索から選択までの経緯」で述べたように、膨大な情報量を整理し、知りたいことを叶えるのに適している資料を選ぶ作業ができたことは、卒業研究を控える学生にとっても教員にとっても、とても有意義だったと思っている。

2つめは、報告文執筆に際し、学生各自が資料から得られた情報の整理と考察にとどまらず、期待や展望も書いたことである。学生Aは、小学校と中学校に分けてコロナ禍での音楽行事を調べた次の展開として、コロナ禍を挟んだ音楽行事を比較するなど、より考察を深めたいと述べた。コロナ禍での邦楽や能楽の公演の実際を取り上げた学生Bも、コロナ禍以降の邦楽界の動向に眼差しを向けつつある。学生Cは、特にコロナ禍を機に歌唱や合唱の様々な取り組みを改めて知ったからこそ、ICT教育のようなデジタル化では得られない、声を交わすことで喜びが広がるアナログな合唱という文化が絶えないようにと述べていることが印象深い。学生Dは、コロナ禍の実際や取り組みを知った上で生徒の視点から音楽科教育を見つめ直し、今後の音楽科教育に加えられるであろう新しい授業の工夫や試みにも注目している。

このように、資料を整理して報告し、考察し、期待や展望も述べたことは、何かを学ぶという点でも丁寧かつ

誠実だったために成し遂げられたと言えよう。4年生の卒業研究でもコロナ禍を考え雑誌を資料にするとは限らないが、3年生で得られた経験を生かしながら、各自が明らかにしたいテーマに取り組んで欲しい。